

# 保 育 奉 公

## 大 東 亞 戰 爭 必 勝 完 遂

### 飛行機をつくる子等

倉 橋 惣 三

枯枝にひつかゝつた紙飛行機を見上げて、子さも等がさわいでゐる。そのいろ／＼の聲の中に、「自爆、自爆、」といふ勘高い聲も聞える。風は冷いが日光の強い或る午前である。

その日光の一ぱいにさしてゐる大硝子の窓を背に、机一つを占領して、さつきから飛行機を折りつゞけてゐる男の子がゐる。その机の上には、もう幾つもの紙飛行機が行儀よくならんでゐる。

「これ吞龍ねえ。」

傍を通りかゝつた二人の女の子の一人が、その中でも大きい一機を指さしながら言つたが、振りぢきもしない。

「あらまあ、こんなに澤山。幾つづくるの。」

「、もう一人の女の子が聞いたが、返事もしない。」

「一機ばさうよ。」

元氣よく馳けて來た男の子が、手を伸ばして、その一機を取らうとしたが、つばらな目に威嚇をもつて、その友達をぢつミ見たまゝ手ではやつぱり折りつゞけてゐる。

やがて材料が盡きた。その子は立つて先生のまごころへ行つた。

「また。そんなに澤山………」

「言ひかけて、その子の廣い額に目をやつた先生は口調をかへた。  
「あげますよ。いくらでもあげますよ。材料はこんなに澤山ありますよ。」

ミ箱の中の、古新聞をきちんと切つた一束を、子さも目の前に見せながら、子さも取るに任せた。さうして、だまつて机へ歸つてゆくその子の、しつかり張つてゐる肩を見送りながら、ちよつと唇を噛むやうに、またふるはせるやうにして、小さい聲で言つた。

「一機でも多く。」

若い先生の頬は紅潮してゐる。